

鬼の実

球体アイ 原案 秋田久氏 作文

むかし、むかし、ある三角形の山に鬼の一族が住んでおった。

山の頂きには玉のような実がなる大木があって、鬼たちは秘伝のやり方で大切に実を守っておった。春になると、大木は、かぐわしい香りとともに実をつけるので、まわりの生き物は「鬼の実」と呼んで、いつか、食べてみたいと憧れていたそうなの。けども、みんな、鬼を怖がって誰も実を食べたものはなかった。

ある晴れた日、わんぱくざかりの鬼の子が親鬼に内緒で、川っぺりで実を食べようと、実を抱え、山を下っていった。

下る途中、鬼の子は大きなマツタケを見つけて大喜び。喜んだひょうしに「あれま」。

実は手からするりとこぼれ落ち、ごんごろ ごんごろと転がって、山を駆け下っていく。

ついに実はぽちゃりと川の中に落ちて、すいすいすいすい、川下に流れていく。

流れる実を初めに見つけたのは青く美しいカワセミ。くちばしでつついて割ろうと、実の上にとびのった。実はかたくて、カワセミをのせたまま、すいすいすいすい 流れていく。

そうこうしていると、石のコケをはんでいたアユが、流れてくる実に出くわした。泳ぎながら、実の底をつんつんつんつんやると。アユは皮の味が気に入って、ひつついて泳いでいく。

実はカワセミとアユをおともに すいすいすいすい 流れていく。

次に実を見つけたのは、レンゲの花の蜜を探していたミツバチ。ミツバチたちはぶんぶんぶんんと群がり始めた。群がったハチも携えて、実はすいすいすいすい、川を流れていく。

最後に実を見つけたのは、川で水遊びをしていた、うり坊たち。われさきにと食べようと追いかけた。

カワセミに、アユに、ミツバチに、うり坊。周囲にまとった実はますます、速度をあげて、ずんずんずんずん、川を下っていく。

もう三角山は、はるか向こう。山の頂きの大木も雲にかすんで見えない。

カワセミ、アユ、ミツバチ、うり坊 それぞれが実を味わおうと、ひつつくものだから、

実はくるくるくるくと回転を始めた。

そうこうしているうちに鬼の実は大きな滝にさしかかり。

わーあ どっしゃーん。

滝壺には、青、緑、黄、こげ茶の4色の実が、ぷかぷかと浮いて、不思議な香りを放ち始めたそうなの。

